

國學院大學學術情報リポジトリ

文学の動機

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川合, 康三, Kawai, Kozo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000204

文学の動機

はじめに

人はなぜ文学を書くのか。個々の作品が生み出される契機は何であるのか。この問いは人間にとって文学はどのような意義を持つか、という問いとも関わる。文学の動機を考えることは、文学の意義を個別の作者の側から、作品が書かれる場から見ることである。

この問題をめぐっても、わたしたちは古典文学、ことに中国の古典文学に特有の、あるいは顕著な性格のなかで、考えなげ

川合康三

ればならない。すなわち中国古典文学という強固な因襲の枠組みのなかで文学を営んだ士大夫にとって、個々人の文学製作の動機よりも直接に作用したのは、当時の世において文学が持っていた役割が、まず考慮されなければならない。現実生活の場において、たとえば友を送る際に「送別詩」を書くことは、社会の慣習や文学の因襲のなかに組み込まれていたものであって、書き手の内発的な動機は果たしてどれほど関与したのだろうか。古典文学のなかでは、文学的な因襲や文学を取り巻く当時の環境が、製作する際にもまず作用するものであって、個人にのみ関心を集中させたり、個人の内面に過度に注目することには、

慎重であることを求められる。

そうではあるにしても、個人の内面から文学が生まれることに関する言説は、確実にある。それを見ることによって、中国古典文学における「文学の動機」の一端を探ってみたい。

一 発憤著書

文学の動機として、中国で早くから、そして広く語られてきたのは、いわゆる「発憤著書」の説であった。個人の内面に生じた感情の大きな昂揚、それが文学の製作に駆り立てるとする考えである。これは「毛詩大序」に言う「情中に動きて言に形はる」のなかに含まれ、その一つのケースということができえる。外界の刺激が感情を生み出し、生み出された感情を言語化して表出したものが「詩」であるという「毛詩大序」は、喜怒哀哀楽さまざまな感情を詩の源泉とするが、「発憤著書」は「発憤」という感情の特別な昂揚に絞って、作品の誕生を語るものである。「発憤」とは「発憤忘食」(論語述而篇)のように、平静を逸脱した感情の昂ぶりを意味するものから、司馬遷が漢武帝の封禪の儀に参与できなかつた父の司馬談について、「故に発憤して且に卒せんとす」(『史記』卷一三〇、太史公自序)

というような、不満の思いの激昂まで、広い範囲を掩うが、それを著述の動機として語る司馬遷の「発憤著書」の場合は、現実の場面において災禍に見舞われた不幸を主な内容とする。それを明言するのは、司馬遷「太史公自序」である。

『史記』執筆の由来と概要を語る「太史公自序」のなかで、司馬遷は父司馬談の遺志を受けて史書の執筆を続けてきたことを述べ、そのあとに言う、

七年が過ぎて、太史公は李陵の禍に出くわし、囚禁される身となった。そこで深く嗟嘆して言った、「これはわたしの罪だ、これはわたしの罪だ。体は損なわれて無用のものとなった」。退出してじつと考えてみたのは、「そもそも『詩経』や『尚書』が言葉が短くて意味を取りにくいのは、書き手の考えを伝えたいという思いからだろう。昔、西伯(周の文王)は羑里の地で拘束された時に『周易』を敷衍した。孔子は陳と蔡のあたりで苦境に陥った時、『春秋』を作った。屈原は国を追われ、『離騷』を著した。左丘明は失明して、『国語』ができた。孫子は足斬りの刑に遭って、兵法を論じた。呂不韋は蜀に左遷されて、世に『呂覽』が伝わることになった。韓非子は秦に囚われて、「説

難「孤憤」がある。詩三百篇はおおむね賢者聖人が発憤して作ったものである。こうした人々はみな心に鬱屈するところがあり、はけみちを見出すことができないうために、そこで過去を記し、未来を考えたのである」。

七年而太史公遭李陵之禍、幽於縲紲。乃喟然而歎曰、「是余之罪也夫。是余之罪也夫。身毀不用矣」。退而深惟曰、「夫詩書隱約者、欲遂其志之思也。昔西伯拘羑里、演周易。孔子厄陳・蔡、作春秋。屈原放逐、著離騷。左丘失明、厥有國語。孫子臆脚、而論兵法。不韋遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難孤憤。詩三百篇、大抵賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道也。故述往事、思來者」。

腐刑という災禍に遭遇した司馬遷は、先人がいずれも苦境に陥った時に世にのこる書物を著していたことを思い起こす。挙げられるのは西伯から韓非子に至る七人。一は西伯（周文王）による『易』の敷衍。西伯が殷の紂王によって羑里の地で収監されたことは、『史記』卷三、殷本紀に見える。崇侯虎というものが西伯を殷の紂王に讒言し、そのために「紂は西伯を羑里

に囚ふ」。『尚書大伝』（『藝文類聚』卷八四、『太平御覽』卷八〇七所引）にも「文王 羑里に囚はる」と記される。

しかし幽閉されたことを契機に『周易』の八卦を六十四卦に拡張したことは、『史記』卷四、周本紀に、「其の羑里に囚はれ、蓋し易の八卦を益して六十四卦と爲す」という以外に見ることができない。『史記』卷四一、越王勾踐世家では、呉に敗れて絶望する勾踐に対して、大夫種が「湯（殷の湯王）は夏臺に繋がれ、文王は羑里に囚はれ、晋の重耳は翟に犇り、斉の小白は莒に犇り、其れ卒に王霸たり。是に由りて之を觀れば、何遽ぞ福と爲さざるか」と励ます言葉が記される。過去の王者覇者は一度は苦難に見舞われたが、最後には勝者となったことを列挙して、敗戦を福に転換せよと勧めるのである。しかしそれは文王が禍を福に転じて周王朝の建立を成し遂げたことを語るもので、『易』の敷衍に向かったことには触れない。管見の及ぶ限り、文王が羑里に囚えられた事件と『周易』増補との関連を語る記述は、『史記』周本紀以外には見えないのである。

二は孔子のいわゆる「陳蔡の厄」。これについては、『史記』卷四七、孔子世家が具体的に記しているが、しかしそこに陳蔡の厄が『春秋』撰述の契機となったという記述はない。「陳蔡の厄」と『春秋』撰述の間に直接の因果関係があることは確認

できない。

三は屈原の「離騷」。これも『史記』卷八四、屈原賈生列伝に、讒言を受けた屈原が「故に憂愁幽思して離騷を作る」と記される。

四の左丘明『国語』。「左丘失明」の一文では、左丘明が失明するという事件が起こって『国語』が書かれたのか、それとも元から盲目であった左丘明が『国語』を著したのか、はっきりしないが、いずれにしても盲目という不幸な状態と『国語』執筆が結びつけられている。しかし左丘明が盲目であったという記載は、『史記』のこの箇所以外に見られないし、もちろんそのために『国語』を執筆したという記述はほかにない。

五の孫子『兵法』。『史記』卷六五、孫子呉起列伝では、「孫子」を「孫臏」のこととして、ともに鬼谷子について兵法を学んだ龐涓にねたまれて「其の両足を断たれ」と述べたが、『兵法』執筆との因果関係については触れない。

六の呂不韋『呂氏春秋』。『史記』卷八五、呂不韋列伝によると、秦王の十年（前二三七）に宰相を罷免されて一族が「蜀に徙され、遂に鳩を飲みて自殺」したのであったが、食客の話を集めて『呂氏春秋』を編んだのは宰相在任中のことであって、著述と失脚は時間の順序が逆である。これについてはすでに劉

知幾が、その非を指摘している。

『漢書』には司馬遷の「任少卿に与うる書」が載せられ、そこで昔から著述はすべて苦難によつて生まれたと、次々記している。その最後に「（呂）不韋は蜀に遷り、世に『呂覽』を伝う」というが、呂氏が著述したのは、賢者たちを広く招き、春申君・信陵君に倣い、異聞を集め、『荀子』・『孟子』のような書物を著そうとして、一字を書いたために、千金で購ったのであった。すなわち当時世に広まって、長い時間が経過していたのであって、蜀に遷った後になつて、初めて伝えられたわけではない。また身が放逐されたことによつて、書物が珍重されたに違いない。すなわち著作は発憤著書にもとづくという説とは関わりがないのである。

漢書載子長與任少卿書、歷說自古述作、皆因患而起。末云、「不韋遷蜀、世傳呂覽」。案呂氏之修撰也、廣招俊客、比躡春陵、共集異聞、擬書荀孟、思刊一字、購以千金。則當時宣布、爲日久矣。豈以遷蜀之後、方始傳乎。且必以身既流移、書方見重、則又非關作者本因發憤著書之義也。

〔史通〕外篇・雜説上)

七の韓非子と『韓非子』。これも『史記』卷六三、老子韓非列伝によれば、『韓非子』の執筆は韓にいた時期のことであり、それが秦王の賞賛を得たのを機に秦に入ったが、そのうち秦の李斯や姚覚の讒言を受けて獄死したというから、やはりまた順序が逆である。

以上を要するに、災厄に遭遇したことを機に著述に向かったとして司馬遷が挙げた七人の事例は、事実と齟齬するもの、因果関係が認められないもの、因果関係が『史記』の記述のなかにしか見られないもの、そのいずれかに収まってしまふ。過去の人物がそれぞれ災禍に巻き込まれたことと、彼らが著述をのこしていることはいずれも事実であるとしても、災禍と著述を因果関係で結びつけたのは、司馬遷が作り出したものだったのだ。司馬遷は自身が見舞われた「李陵の禍」を『史記』執筆に結びつけるために、先人の著述も災厄から生まれたものだという筋立てを編み出し、そうすることによって自身の禍から立ち直ろうとしたのであろうか。

執筆に向けて自己を鼓舞したにとどまらない。『史記』執筆を西伯以下、古来の著述の系譜のなかに置くことは、著述家と

して自分を規定し『史記』という著作を、歴史のなかに位置づけようとする大きな自負を含んでもいる。

先人の災厄に見舞われた経験が著述を生み出す契機になったと、災厄と著述の因果関係を作り出したことは、事実の歪曲、ないし事実の捏造としてとがめるよりも、著述する個人とその著作との間に退つ引きならない関係を提起したことの意義に注目すべきだ。ここには近代に至つて顕著となる、作者と作品との緊密な関係がすでに明確なかたちをもつて示されているのである。すなわち文学作品は個別の作者の個別の必然性から生まれたものであり、作品と作者との間には代え難い結びつきがある——そう考えられるのは、作者が明確な輪郭をもつた時代以降のことである。司馬遷が挙げる例には、作者を個人に特化して捉えずぎているきらいがある。たとえば『周易』は西伯という個人の手によって敷衍されたと言くには無理がある。そうであるにしても、作品は作者のやむにやまれぬ動機から生まれるといふ觀念が、ここにはじめて提示されたのである。

では、災厄に見舞われた人間は、どのような心のメカニズムによって著述に向かったのだろうか。「太史公自序」では右の引用の終わりの箇所に、「此の人は皆な意に鬱結する所有りて、其の道を通づるを得ざる也。故に往事を述べ、来者を思ふな

り」と言う。鬱屈をはらすすべがないこと、人間の過去と未来に思いを巡らすこと、二つが「故に」という語で結ばれているけれども、その間はどのように埋めればよいのだろうか。現実において無力であるために、現在を離れて人間の歴史のなかへと思考を繰り広げる、というのだろうか。『漢書』卷六二、司馬遷伝が引く任安への書翰(『文選』卷四一、「任少卿に報ゆる書」)では、記述がやや異なる。『文選』から引けば、「故述往事、思來者」のあとに続けて言う、

左丘明が失明し、孫子が足を切られたごときは、結局登用されることはないので、公の場から退いて書物を著し、その憤懣をはらし、ただ文章のなかだけに記して、自分の思いを外に表したのである。

乃如左丘無目、孫子斷足、終不可用、退而論書策、以舒其憤、思垂空文以自見。

現実の場で行動する機会を奪われた人間にとって、著述だけが自分を表現する手立てであった、というごくよくある。言い換えれば、自分がこの世に存在したあかしとして、著述に向

かったということになるだろうか。

『史記』のなかには、人は困難にぶつかることによって発憤するという例は、ほかにも見られる。たとえば卷七九、范雎・蔡沢列伝の賛には、范雎と蔡沢について、「然るに二子 困厄せざれば、悪くんぞ能く激さんや」と司馬遷は言う。これは著作に限定した事例ではなく、苦難に遭遇することによって始めて、人は大きな仕事を成し遂げることができるのである。これと同じ考えは、司馬遷に先立って、『孟子』に見ることがができる。

孟子が言う、「舜は田畑のなかから立ち上がり、傳説は土方のなかから取り立てられ、膠鬲は海産物業者のなかから取り立てられ、管仲は刑吏に囚われたなかから取り立てられ、孫叔敖は海浜から取り立てられ、百里奚は市場の商人の身から取り立てられた。それゆえ天はその人に大きな任務を降そうとする時、まずその精神を苦しめ、筋骨を痛めつけ、肌膚を飢えさせ、その身を無一文にさせ、行動は何をしても混乱させ、そうすることによって心意を動かし性情を堅固にさせ、できないことをできるようにさせるの

だ。人は過ちを犯して、そのあとで改めることができる。心を苦しめ、思いを閉ざされ、そうしたあとで成し遂げることができる。顔色にあらわし、声に発して、そうしたあとで理解される。国の中では秩序を守る大臣や補佐する臣下がなく、国の外では敵対する国や外患がなければ、国は常に滅びるもの。かくして憂苦することによって生きることができ、安楽によつて死を招くことがわかる。

孟子曰、舜發於畎畝之中、傳説舉於版築之間、膠鬲舉於魚鹽之中、管夷吾舉於士、孫叔敖舉於海、百里奚舉於市。故天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所為、所以動心忍性、曾益其所不能。人恒過、然後能改。困於心、衡於慮、而後作。徵於色、發於聲、而後喻。入則無法家拂士、出則無敵國外患者、國恒亡。然後知生於憂患而死於安樂也。(『孟子』告子下)

人が大業を成すために、天は苦難を与えたというのである。また『孟子』 尽心上にも、

孟子が言う、「徳行、知恵、技術、才知のある人間は、常に災患のなかにいるものだ。主君に見放された臣下、親に見捨てられた子供のみが、憂苦のなかに心を勞し、不幸を深く苦慮するので、事理に到達できるのだ」。

孟子曰、人之有徳慧術知者、恒存乎疾疾。獨孤臣孽子、其操心也危、其慮患也深、故達。

ここでは不幸のなかからなぜ能力や徳行のすぐれた人物が生まれるのか、「其の心を操るや危ふく、其の患ひを慮るや深し」と、その理由が示唆されているが、これはのちの歐陽脩の言述(後述)にもつながっている。

思いがけない不幸に見舞われたことから著述が生まれるという、司馬遷の「発憤著書」説は後の世にも引き継がれていく。梁・鍾嶸の『詩品』には「上品」に置かれた李陵について、「陵をして辛苦に遭はざらしむれば、其の文は亦た何ぞ能く此に至るや」、李陵が味わった辛苦が彼の五言詩をみごとなものにしたというのである。『詩品』より成書が十数年早い劉勰『文心雕龍』では、「李陵・班婕妤は後代に疑はる」(明詩)

と言うように、すでに李陵自身の作とすることに疑問を投じているが、『詩品』は李陵の詩を真作とみなし、匈奴に降つて漢王朝から排斥を受けた苦難を、李陵五言詩が傑作たるゆえんとしている。ちなみに蘇武は『詩品』に取り上げられず、『文心雕龍』にも蘇武の名は見えない。節を曲げない蘇武の硬骨よりも、運命の敗者李陵のほうに、早くから人々の注目が集まっていたものであろうか。

二 賢人失志

司馬遷の語つたのは思いがけない大きな災厄に出くわした体験であったが、そうした突発的に身を襲つた事件ではなく、士人がしばしばつきまとわれる不本意な状況、ことに官界における不遇、そこに生じる憤懣の思いを詩の契機とするのが「賢人失志」の説である。『漢書』芸文志、詩賦略の序に言う、

春秋時代の後、周の道はしだいに衰え、国を訪問して歌を詠ずるといふ習慣は、諸国の間で廢れていった。詩を身につけた人士は、国から見放されて布衣の身となった。そして賢人失志の賦が起こつたのである。大儒の孫卿や楚の

屈原原は、讒言に遭つて国を憂い、いずれも賦を作つて諷諭した。

春秋之後、周道窳壞、聘問歌詠、不行於列國。學詩之士、逸在布衣。而賢人失志之賦作矣。大儒孫卿、及楚屈原、離讒憂國、皆作賦以風。

国の使者として詩歌を詠ずる公的な場を失つたために、その憤懣のはげ口として私的に詩を作るようになった、と『漢書』芸文志は言う。ともに不幸を動機とするとはいへ、発憤著書が生死に関わるほどに重大な災厄を機とするのに対して、賢人失志は災厄ではなく、持続する不遇感である。

ただここで留意すべきは、発憤著書にせよ、賢人失志にせよ、不幸の程度に差はあつても、どちらも外部から与えられた条件に対する反応であることだ。確かに『礼記』樂記が「人の心の動くは、物、之をして然らしむる也」と言うように、あらゆる感情は外界からの刺激から生まれるものだとしても、発憤著書、賢人失志をもたらす外物の刺激は、人の境遇を左右するようなものであつて、日常のなかにおけるもつと微細な、胸中にかすかな波紋を生じるような刺激、詩人の心のなかにおのず

と生じる繊細な感情の變、境遇とは関わらないそうした感情の細やかな動きについて語るものではない。したがって発憤著書、賢人失志のみを文学の動機とするならば、災厄に見舞われることがない人、順境に恵まれた人にとっては、文学を営む動機を持ってないことになる（これに関しては、「六 もう一つの動機」の章に述べる）。

己れの徳性や能力に揺るがぬ自負を抱きながら、それにふさわしい立場を与えられないことを嘆く「賢人失志」は、中国士大夫が詩を作る動機として普遍的なものとなる。たとえば『後漢書』馮衍伝（列伝、卷二八下）は、馮衍が先立つ罪過のために用いられず、「衍は志を得ず、退きて賦を作る。又た自ら論じて曰く」として「序」を引いたあと、「乃ち賦を作りて自ら厲し、其の篇に命じて「顕志」と曰ふ」として「顕志賦」を掲げる。

それを受けて『文心雕龍』才略篇では、「敬通（馮衍）は在雅だ辞説を好む。而して盛世に坎壞し、「顕志」「自序」は、亦た蚌病みて珠を成すなり」という。不遇の苦しみから詩賦が生まれることを、貝にとつては辛い病が、人のとつては貴重な真珠を生むことにたとえるのである。これは『淮南子』説林訓の

「明月の珠は、蛇の病にして我の利なり。虎の爪・象の牙は、禽獸の利にして、我の害なり」に基づくものだが、それを詩人が詩を生み出す美しい比喩に変えている。実際、今にのこる文学作品は、「盛世」を謳歌し、健康と幸福から生まれたものよりも、詩人の「病」から、憂愁や苦悶の果てに書かれたものが、圧倒的に多い。現実世界、世の中のありようと緊密に結びついていた中国の作者にとつても、文学はそれとは別の次元で自立していたものであり、だからこそ文学は存在の意義をもちえたのだろう。

三 詩人薄命

災厄や不遇といった個人の身に生じた不幸が契機となって詩が生まれるという考えは、広く浸透するにつれて、やがて因果関係が逆転する。不幸から詩が生まれるのでなく、詩人はもともと不幸なものだ、というのである。

白居易の言う「詩人 命薄し」は、詩人というもののは本来薄幸な存在だと語っている。晩年、洛陽の履道里に退去して自適の暮らしを満喫していた白居易は、その地でものした詩群を一つにまとめる。その序に当たる「洛詩に序す」のなかで、彼は

古来多くの詩は讒言を受けて放逐されたとか、出征の苦しい旅とか、衣食の欠乏、病氣と衰老とか、生別死別とか、人が被る様々な不幸から生まれてきた、そのために昔から今に至るまでの詩の八、九割は悲哀憂愁の作であると述べて、「世の謂ふ所の文士は数奇なるもの多く、詩人は尤も命薄しとは、斯に於いて見はる」という。白居易はそれに續けて、「毛詩大序」にいうように、内面に生起した感情が言葉によって外に現れ出たものが詩であるとするならば、欲びも人間の真率な感情である以上、自分は人々が歌わなかつた生の欲びを歌おうと、洛陽での閑適の生活をうたうことも詩の本来の意義にかなうことだと主張するのだが、そのなかに引かれた「世所謂文士多数奇、詩人尤命薄、於斯見矣」は、「世所謂」というように、一般に広く言い伝えられていた俚諺であるかに思われる。ここで言う「詩人」はもはや『詩経』詩人に限られないが、「詩人」の語には世間のなかで恵まれないと同時に、或る種、選ばれた人といった意味合いも含むかに見える。

白居易が記した「詩人 命薄し」は、詩人なるものはそもそも薄幸な存在だとする世間の見方を借りたものだが、詩と詩人の関係をさらに一步進めて、詩が詩人の運命を不幸に陥れるという言葉が、杜甫に見える。杜甫の「天末にて李白を懷う」詩

に、

文章憎命達 文章は命の達するを憎み
魑魅喜人過 魑魅は人の過ぎるを喜ぶ

至徳二載(七五七)、秦州という天涯の地にあつて、天宝四載(七四五)に別れたあと消息のない李白の身を案じた詩である。至徳二載に李白が永王璘の拳兵に加担したかどで夜郎に流謫される罰を受けたことを、杜甫は伝え聞いていただろう。「文章は命の達するを憎む」は李白の見舞われた災厄を、「魑魅は人の過ぎるを喜ぶ」は遙か遠い夜郎までの危うい道中をいかに読める。ここでは「文章」(文学)を擬人化し、文学は詩人が順境の生を生きることが憎悪する、詩人に対して故意に悪意をむき出しにして不幸へと突き落とす。詩人を不幸にするのとは文学自体の意思であると言いつつ、詩人を不幸にするのは文学自体の意思であると言いつつ、そこには文学に憎まれた詩人を、特別に選ばれた者とみなす意識も伴つていよう。

四 韓愈

詩と詩人の境遇との関係については、韓愈にもいくつか文章がある。「荆潭唱和詩の序」は荆南觀察使の裴均、潭州刺史の楊憑、両者の唱和した詩集に寄せた序であるが、その冒頭に言う、

……およそ平和な世の音楽はあつさりしたものであり、憂愁のなかから発せられる音声は奥深くきめ細かい。喜樂から生まれる言葉は優れた表現になりにくく、困苦から生まれる言葉は容易に見事なものになる。それゆえ文学作品は、つねに羈旅や草深い所から生まれるのだ。王公・貴人に至つては、氣力は充実し志は満たされているから、生まれつき詩才があり詩を好む者でなければ、詩を作る暇などありはしない。……

……夫和平之音淡薄、而愁思之聲要妙。謹愉之辭難工、而窮苦之言易好也。是故文章之作、恒發於羈旅草野。至若王公貴人、氣滿志得、非性能而好之、則不暇以爲。……

にもかかわらず、高い地位にあり、恵まれた境遇にある裴均・楊憑の唱和詩はすぐれていると、「序」は展開してゆくのだが、二人の唱和詩を賞賛する前に置かれたこの一段にも、作品のよしあしと作者の順境逆境との一般的な関係が記されている。「夫れ和平の音は淡薄にして、愁思の聲は要妙なり。謹愉の辭はたゞみたり難くして、窮苦の言は好くなり易し」——ここには「和平」・「謹愉」、「愁思」・「窮苦」という条件と、「淡薄」・「難工」と「要妙」・「易好」という結果が結びつけられ、「詩人は命薄し」といった宿命論的な言い方に比べると、条件と結果の間に必然性があるかのように語る。結果を導く理由を付け加えれば、後述の歐陽脩の論に到達するもので、その一歩手前と言えよう。

韓愈「高閑上人を送る序」には、周囲の状況との関わりの中から大きな刺激を受けると、それが作品の契機になるといふ言説がある。

……以前、張旭は草書だけを好み、ほかの技術を学ばなかつた。喜怒や困窮、憂愁や喜悅、怨恨や思慕、醜酌して物憂さ憤懣を抱くとき、心に感じるところは、いつも草書

によってそれを吐きだした。外物の観察では、山川崖谷、鳥獸虫魚、草木の花実、日月と星々、風雨や水と火、雷鳴のとどろき、歌舞やいくさ、天地の事物の変動、喜ぶこと驚くこと、すべて草書にこと寄せた。それゆえ張旭の書は、鬼神のように変化し躍動し、つかみ取ることもできない。こうして一生を終え、名が後世に伝えられたのである。

……往時張旭喜草書、不治他伎。喜怒窘窮、憂悲愉快、怨恨思慕、酣醉無聊不平、有動於心、必於草書焉發之。觀於物、見山水崖谷、鳥獸蟲魚、草木之花實、日月列星、風雨水火、雷霆霹靂、歌舞戰鬥、天地事物之變、可喜可愕、一寓於書。故旭之書、變動猶鬼神、不可端倪。以此終其身、而名後世。

これは不遇やそれに伴う憂苦に限定したものではなく、欲びや楽しみも含めて、外界に対して鋭敏な感性をもつことが書において必要だと説き、仏僧であるゆえに心が波立つことがない高閑上人の書は果たしてそうした心の揺らぎから生まれたものであるのかと、疑問を呈している。

先に『孟子』告子下のなかに、天は大きな事業を成し遂げる人に対して敢えて苦難を与えるという説を見たが、それに連なる論が韓愈にも見える。貞元十七年（八〇一）、孟郊が溧陽に県尉として赴く際に贈られたものとされる「孟東野を送る序」がそれである。

そもそも物は平衡を失った時に音を立てる。草木に音はないが、風がたわめて音を立てる。水に音はないが、風が揺り動かして音を立てる。躍り上がるのは物にぶつかるからであり、勢いよく流れるのは塞ぎ止めるからであり、沸騰するのは火で煮立てるからである。青銅や石の楽器に音はないが、それを撃てば音を発する。人の言葉におけるのも同じようなもので、やむをえないことがあって、それが言葉となる。歌うのは思うところがあるのであり、哭するのは胸に抱くところがあるからだ。およそ口から出て音となるのは、みな平衡状態を失ったものではないか。

大凡物不得其平則鳴。草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之鳴。其躍也或激之、其趨也或梗之、其沸也或炙之。金石之無聲、或擊之鳴。人之於言也亦然、有不得已者

而后言。其譎也有思、其哭也有懷。凡出乎口而為聲者、其皆有弗平者乎。

これに継いで、中略する箇所を拾えば、音楽は「善く鳴る者」を楽器として選んで音を発する、自然は鳥・雷・虫・風といった「善く鳴る者」を選んで季節ごとに音を発する。人も同じであつて、人の発する音声のなかでは「言」（言葉）、「言」のなかでは「文辞」（詩的言語）、それが精妙なるものであつて、「文辞」という「善く鳴る者」を選んでそれに音を發せさせる、と語る。以下、人間の「善く鳴る者」である文学の歴史をたどり、堯舜の世から卓越した表現者の名を連ねて唐に至る。

唐が天下を取つて以来、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀が、その才によつて音を發した者である。今の世に生きていて低い地位にいる者が、孟郊である。孟郊ははじめて自分の詩によつて音を立てた。そのすぐれた作は魏晉を越え、努力を重ねて古代にまで届いている。それ以外の作でも漢代にまで行き及んでいる。わたしと交わりがある者では、李翱と張籍が特にすぐれる。三人の立てる音

は、まことにすぐれている。いったい、天は彼らに和やかな音を立てて、国家の隆盛の音を立てさせようとするのか。それとも彼らを窮苦に追いやつて、不幸の音を立てさせようとするのか。三人の運命は天に懸かつている。だから高い地位にいても喜ぶことではないし、低い地位にいても悲しむことではない。孟郊が江南に行かされるのには、積然としない思いを抱いているようだ。そこでわたしはこれが天に命ぜられたものであることを説いて、慰めるのである。

唐之有天下、陳子昂・蘇源明・元結・李白・杜甫・李觀、皆以其所能鳴。其存而在下者孟郊。東野始以其詩鳴。其高出魏晉、不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。從吾遊者、李翱・張籍其尤也。三子者之鳴、信善鳴矣。抑不知天將和其聲、而使鳴國家之盛邪。將窮餓其身、思愁其心腸、而使自鳴其不幸邪。三子者之命則懸乎天矣。其在上也奚以喜、其在下也奚以悲。東野之役於江南也、有若不釋然者。故吾道其命於天者以解之。

唐代を代表する文学として、陳子昂・蘇源明・元結を挙げる

のは、古文を標榜する韓愈が仰ぐ先駆者であり、李白・杜甫は韓愈が繰り返し讃える大詩人であり、李観は韓愈の若い時期の友人で、高く評価しつつ夭折を悼んだ人である。こうした韓愈自身の唐代文学史観のなかに、同時代のなから親交の深い孟郊・李翱・張籍の三人を挙げる。

天は「善く鳴る者」を選んで、時代を代表する文学者に仕立て上げようとする。歎びの文学を作らせるためには幸福を、悲しみの文学を作らせるためには不幸を与える。従って不幸は天が「善く鳴る者」に不幸の文学を書くために与えたものであって、天から降された使命として甘受しなくてはならない、と韓愈は南方に赴く孟郊を慰撫する。天の意思に還元することで、苦境に沈む詩人を慰めようとする趣旨の文ではあるが、不幸はすぐれた文学を生み出すために引き受けなければならない条件であるとして、境遇と文学の関係を明らかにしている。ここでも不幸な詩人は「善く鳴る者」として天から使命を与えられた、選ばれし者なのである。

五 歐陽脩

詩人は薄命な存在であるという通行する観念に対して、詩人

が不幸であるのではなく、不幸から詩が生まれるのだと合理的に説明をしたのが歐陽脩である。友人梅堯臣の死後、彼の詩集を編んだ、その「序」に言う、

詩人は栄達することはまれで困窮する人ばかりだと言われるが、いったいそんなことがあるのか。世に伝わる詩には、確かに昔の不幸な人の手になるものが多い。およそ持てるものを内部に蓄えながらそれを世に押し広めることができない士人は、好んで自分を山岳や水辺に解き放ち、虫魚・草木・風雲・鳥獸という自然のありさまを目にし、常々その不思議さを探り、心の内には憂愁や憤懣が鬱積し、怨嗟を起こして羈臣・寡婦の悲嘆を語り、言葉にしたい人の心を写し取る。それで困窮すればするほど、よい詩が生まれるのである。そうしてみると、詩が人を不幸に追いやるのではなく、まさに不幸な人であるからすぐれた詩ができるのだ。

予聞世謂詩人少達而多窮、夫豈然哉。蓋世所傳詩者、多出於古窮人之辭也。凡士之蘊其所而不得施於世者、多喜自放於山巔水涯。外見蟲魚草木風雲鳥獸之狀類、往往探其

奇怪。内有憂思感憤之鬱積、其興於怨刺、以道羈臣・寡婦之所歎、而寫人情之難言。蓋愈窮則愈工。然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也。（梅聖俞詩集序）

「詩の能く人を窮せしむるには非ず、殆ど窮する者にして後に工みなり」と、詩と困苦の關係を逆転する。その理由を説く前に、歐陽脩は「窮する者」に与えられる二つの条件を挙げた。一つは外的な条件で、窮者の置かれる場であり、二つは内的な条件で、窮者の心のなかの思いである。窮者は世間に受け入れられないために巷を離れて山や水辺に住む。そのために山水に親しむ機会が多く、それによって自然の神秘を探ることができ、「外に虫魚草木風雲鳥獸の状類を見る」という言い方は、『論語』陽貨篇の「小子 何ぞ夫の死を学ぶこと莫きか。……多く鳥獸草木の名を識る」を思わせるところがある。

窮者はまた自身の受けた苦難によって胸中に憂愁や憤懣を蓄積する。それは人の悲しみに対する感性を研ぎ澄まし、心の機微を表現することを可能にする。「以て羈臣・寡婦の嘆く所を道ふ」という「羈臣・寡婦」は、鍾嶸『詩品』の序に「楚臣境を去り、漢妾 宮を辞す」云々と列挙されるように、詩の題材として定着しているものだが、自分が悲痛を抱えていること

によつて他者の悲哀に敏感になれるというのである。つまり自分自身の境遇や心情を直接表現することに限らず、従来うたわれてきた悲哀の詩を書くにあたつても、きめ細かく心の動きを写し取ることに長けるといふ。

歐陽脩はまた薛奎の文集の序にも言う、

君子の学問というものは、実務に發揮されることもあるし、文学にあらわす場合もあるが、困るのはその双方を兼ね備えるのがむずかしいことだ。それは時運に乗つた人は、功業が朝廷に鮮やか、名声は竹帛に輝く。そのために常に文学を些末なことと見なすし、また文学に携わる時間がなかつたり能力がないこともある。思いを遂げられない人は、困窮のなかで辛酸をなめ、苦慮しながら思いを突き詰め、心を激し昂ぶらせるとともに、世間に働きかけることができないうために、すべてをひとえに言葉に託した。それゆえに困窮のなかですぐれた表現が生まれるというのだ。

君子之學、或施之事業、或見於文章、一而常患於難兼也。蓋遭時之士、功烈顯於朝廷、名譽光於竹帛、故其常視文章

爲末事、而又有不暇與不能者焉。至於矢志之人、窮居隱約、苦心危慮而極於精思、與其有所感激發憤、惟無所施於世者、皆一寓於文辭。故曰窮者之言易工也。(薛簡肅公文集序)

歐陽脩の説は詩人の不幸と作品との関係を理的、合理的に解き明かす。困難な状況のなかで思索を研ぎ澄まざざるを得ないから、そこに傑作が生まれるというのだ。欧陽脩が具体的に述べる理由は、反論しがたいものであるにしても、あまりに具体的には明らかにするために、たとえば杜甫の「文章は命の達するを憎む」のような、詩人と不幸の關係について語った言葉に含まれていた奥深さが乏しくなってしまうくらいがある。こうした合理的な思考がいかに宋人らしいのである。ともあれ、これによって不幸な詩人からすぐれた詩が生まれるという命題に、明快な説明が与えられたことは確かである。

六 もう一つの動機——曹丕の「不朽の盛事」

「発憤著書」にせよ、「賢人失志」にせよ、周りから与えられない不幸な状況がすぐれた作品を生むとするならば、順境のなか

にあつては秀作は作り出せないことになる。不遇や困窮から免れた人にとつて、文学の営みに向かう契機は何であろうか。それを語っているのは、曹操の嫡子として生まれ、父の成し遂げた事業を受け継ぎ、魏王朝を建てた曹丕である。

曹丕の文学観は『典論』『論文』(『文選』卷五二)のなかのこざれている。

そもそも文学というのは国家を統治する偉大な営為、不朽の大事である。寿命はやがて尽きるものであるし、榮華快樂は自分一人の身に留まるものである。どちらも必ず終わる時があり、文学が限りなく続くのに及ばない。それゆえにいにしへの文学者たちは身を翰墨に寄せ、思いを作品にあらわしたのである。優れた歴史家の言葉を借りずとも、高位に立つ勢いに託さずとも、名声はおのずと後世に伝わる。それゆえ、西伯は幽囚の身で『周易』を敷衍し、周公旦は輝かしい地位にあつて礼を制定したので。困窮しているからといって励まないことはなく、安樂だからといって思考を怠ることはなかった。そうであれば古人は美玉を軽んじて寸陰の時を大切にし、時間が過ぎ去るのを畏れたのである。しかるに努力しない人が多い。貧賤にあれ

ば飢え寒さを恐れ、富貴にあれば快樂に流され、そうして当面の用事にかまけて、千載の仕事を忘れる。上では日月が過ぎ去り、下では肉体容姿が衰えてゆき、たちまちのうちに万物とともに異物となる、これこそ志ある士人の大いに痛恨するところである。

蓋文章經國之大業、不朽之盛事。年壽有時而盡、榮樂止乎其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍。不假良史之辭、不託飛馳之勢、而聲名自傳於後。故西伯幽而演易、周且顯而制禮。不以隱約而弗務、不以康樂而加思。夫然則古人賤尺璧而重寸陰、懼乎時之過已。而人多不強力。貧賤則懾於飢寒、富貴則流於逸樂、遂營目前之務、而遺千載之功。日月逝於上、體貌衰於下、忽然與萬物遷化、斯志士之大痛也。

『典論』論文篇は「文章は經國の大業」の一句が名高いけれども、実際に言葉が費やされているのは、その対の「不朽の盛事」のほうである。「西伯 幽されて易を演ず」という句からもわかるように、曹丕は明らかに司馬遷の「發憤著書」説を意識している。司馬遷が逆境で著述をした「西伯」だけを挙げて

いたのに対して、順境のなかで礼樂を整えた「周公」のほうも挙げて、逆境・順境に関わりなく著述はなされるものだというのが曹丕の強調したい所だ。

逆境から著述が生まれる説に代わって、曹丕が提出した文学製作の動機は、人の生の有限性であった。誰でも免れない死、それ乗り越えるのは著述だ、著述によって人は死後にまで名前をのこすことができる、不朽が可能になる、というのである。

親しい人たちが一気に忽然として世を去るという経験が、曹丕にはあった。建安二十二年（二二七）の疫病で、建安七子のうちの徐幹、応瑒、劉楨が亡くなり、陳琳も同じ年に没している。「朝歌令吳質に与ふる書」（『文選』卷四二）では、曹操政権のもとに集められた文人たちとのかつての交遊を縷々綴って懐かしむ。そこには曹丕の真情があふれ出ている。しかしそれが「今は果たして分別し、各おの一方に在り」、「節は同じなるも時は異なり、物は是にして人は非なり」、忽然として失われてしまったのである。

また「吳質に与ふる書」（『文選』同卷）にも言う、

……先年、疫病がはやり、知友のなかにも多くがその災

いにかかりました。徐幹・陳琳・応瑒・劉楨、いちどきに死んでしまいました。悲痛は言葉になりません。かつて遊んだ時は、行けば輿を連れ、止まれば席を並べ、しばしも離れることはありませんでした。酒杯を交わし、楽器を奏し、酔って耳がほてり、仰いで詩を賦したものでした。この時に当たっては、うかつにもそれが幸福であると感じずきもしませんでした。百年を与えられた寿命として、いつまでも続けられると考えていたのです。それがなんと数年のうちはこの世を去ってほとんどいなくなってしまうとは思ってもよらないことで、口にするのも胸を痛めます。ちかごろ彼らの遺作を選び、一冊の本にまとめました。名前を見れば、もはや鬼録に入っています。かつての交遊を思い起こすと、今もまぶたに浮かびます。だのにこの人たちは、土に化してしまいました。言葉も見つかりません。

……昔年疾疫、親故多離其災。徐陳應劉、一時俱逝。痛可言邪。昔日遊處、行則連輿、止則接席、何曾須臾相失。每至觴酌流行、絲竹並奏、酒酣耳熱、仰而賦詩。當此之時、忽然不自知樂也。謂百年已分、可長共相保。何圖數年之間、零落畧盡、言之傷心。頃撰其遺文、都爲一集。觀其

姓名、已爲鬼錄。追思昔遊、猶在心目。而此諸子、化爲蕘壤、可復道哉。……

曹丕の二通の書翰は、文人どうしの交遊の楽しみを語る早い例である。事細かに回想される愉悅の日々、そのうちの何人かが突然世を去ったあとの空虚、この落差に曹丕は人の生のはかなさを痛感したことだろう。彼らの文集を編纂することは、失われたその生をこの世に繋ぎ止めることでもあった。『典論』論文篇に語るところは、曹丕が見舞われたこのような体験に基づいていたはずである。「忽然として万物と与に遷化する」人の生のはかなさ、その宿命を免れるせめてもの手立てとして、曹丕は文学によって「不朽」たらんとしたのである。

おわりに

中国における文学の動機として語られた「発憤著書」、それに類する「賢人失志」、そしてまた別の角度から語る曹丕の「不朽の盛事」を見てきた。「発憤著書」は自己の過去の災厄を、「賢人失志」は自己の現在の不遇を機とし、「不朽の盛事」は自己の未来、死後の存続を願うものであった。「不朽盛事」

は災厄とか不遇とかに関わらない、死を免れない人間の必然から発したもので、たまたま与えられた状況から発する「発憤著書」「賢人失志」とはぜひぶん隔たりがあるかに見える。しかし「発憤著書」「賢人失志」はこの世で見舞われた不幸や不遇から自分を取り戻して、自分という存在を書くことによつてしるしづけようとされるものであり、「不朽盛事」はいずれこの世から消えていく自分の生、それを書いたものによつて形あるものとして後世にのこそうとするものであり、自分という存在を刻印しようとする意図においては通じ合うものがある。過去や現在にこだわるにせよ、未来にこだわるにせよ、中国の文人は自分の生きたあかしをのこすために書くことに向かったのである。